

博士論文 概要書

「中間」と〈中間〉

—南方熊楠 夢の記述に関する研究／「やりあて」と関連させながら—

The Middle Place and The Intermediate Place

—A Study of Kumagusu Minakata's Descriptions of Dreams and
Relationships between His Dreams and *Yariate*—

早稲田大学大学院社会科学研究科

地球社会論専攻 生命倫理学研究

唐澤 太輔

本論文では、^{みなかたくまくす}南方熊楠（1867～1941年）による、夢に関する記述と、「やりあて」（偶然の域を超えた発見や発明・的中。熊楠が用いた言葉）について考察を行う。同時に、熊楠の居た特異な^{ポジション}「場所」に焦点を当て、二つの中間領域＝「中間」と〈中間〉について論ずる。「中間」と〈中間〉は位相の異なるものである。「中間」とは、自己が対象と健全な関係を持てる（「適当な距離」にある）場所であり、〈中間〉とは、「自己と対象が統一された場所」＝「一」へと至る可能性をもつ場所なのである。またそこでは、自己と他者の区別は不鮮明となる。

熊楠は「夢の採集者」であった。隠花植物や粘菌を採集し写生・記録したように、夢に関しても膨大な数の収集と記録を行っていた。そして、夢の記録は熊楠自身のものだけに留まらない。家庭を持ってからは、時に家族や女中が見た夢まで聞き出し、記録している。なぜ、熊楠はこれほどまでに夢にこだわり続けたのか。夢を記録することで何を知らうとしたのか。また夢と「やりあて」は、どれほど関係しているのか——本研究が射程に据えるものは、これらの問いである。これらの問いへ、熊楠が採っていた（採らざるを得なかった）我々とは異なる「場所」、そしてその間の「距離」からアプローチを行う。熊楠の「在り方」は、他者と極端に（一体化してしまう程）「近く」接近してしまうか、極端に（逸脱行為をとってしまう程）「遠く」離れてしまうかのどちらかであった。つまり熊楠は、「適当な距離」というものを保持できなかつたのである。このことは、熊楠による、執拗なまでの夢の探究と深く関係している。

日本神話・民俗学の研究者であるカーメン・ブラッカー（Carmen Blacker 1924～2009年）は、熊楠を「無視されてきた日本の天才」と呼んだ。なぜ「無視」されてきたのか。それは端的に、熊楠の居た場所が、我々の居る場所とは極端に異なっていたからである。我々は、熊楠が天才であったことは知っている。しかし、その「実質」は知らないままである。それは、我々が居る場所を基準にして熊楠を捉えようとしても、熊楠は、あまりにも軽やかに「適当な距離」を突破して、極めて他者から逸脱した場へ、そして極めて自他融合に近い場へ移行してしまうからである。熊楠という天才を本当に知るためには（捕えるためには）、彼の居た^{ポジション}「場所」を突き止めなければならない。

以下、本稿の概要・構成を示す。

[序章]では、本研究の目的・先行研究・研究の方法・本稿の構成について述べる。熊楠の夢への言説、そして南方熊楠という人物そのものが教えてくれること——それは、一言で言えば「距離」である。熊楠は他者との関係において、特異な「距離」しか採ることのできない気質の持ち主であった。極端に「近い」か、極端に「遠い」か、そのどちらかであった。いわば「適当な距離」＝「中間」における「自己—他者」関係を採用することが非常に苦手だったのだ。そのような点から、筆者は熊楠を「極端人 Extreme Person」（筆者の造語）と呼びたい。しかし、そのようなラジカルな「距離」しか採れなかつたことが、彼の超人的な

パワーの源でもあった。日本民俗学の父・柳田国男（1875～1962年）は、熊楠を評して「日本人の可能性の極限」とまで言っている。「適当な距離」を当たり前のようにとっている我々は、普通、それを深く考えることはない。「極端人」であった熊楠の言説・生き方は、この「適当な距離」とは一体何なのかを我々に深く考えさせるものである。この「適当な距離」は、果たして本当に「正常」なのか、「絶対的」なものなのか、あるいは我々マジョリティーの単なる「妄想」なのか。つまり大多数が信じているが故に優勢を占めているだけのものなのではないのか——熊楠の夢への言説・生き方・在り方は、我々の「常識」に疑問符を投げかける。我々にとって近くにありすぎて、あまりにも身近すぎて、見落としているものを、熊楠は我々に気付かせてくれる。同時に、我々個々人の生（個的生命）に含まれながらも、それを越え出てさらに大きく包み込んでいる場＝「統一〔根源的な場〕」、もっと言うならば「生命そのもの」（それは人間にとって、最も「近く」にあるが故に、最も「遠い」ものでもある）とは何かについて知る手がかりも与えてくれる。

【第1章】ではまず、熊楠の夢の記述方法（及び熊楠独自の「夢の記憶法」）と、その記述の経緯を概観する。また、覚醒後も、夢か現実か区別のつかないことの多かった熊楠の様子を、彼の日記の記述から見ていく。熊楠はしばしば、非常にリアリティーをもった夢を見ている。そして、熊楠の日記からは、夢の世界から必死に現実世界に戻ろうとする彼の姿が見て取れるのである。つまりそれは、自他融合の場に近い自他不鮮明な場から、もとの区別ある状態へ引き返そうとする、あるいは自己の「ポジション」を再確定しようと翻弄する姿である。そして、もし熊楠がこの「退路」を見失ってしまったら、果たして彼には何が待っていたのかを、「無」と「不安」から考察する。次に、熊楠の日記における、夢の記述の変遷を見ていく。1888年から晩年（1941年）まで続く夢の記述において、最も恒常的に見ている事柄は、羽山兄弟（繁太郎・蕃次郎）に関するものであった。「やりあて」に関する記述は、「那智隠栖期」以降、急激に増えている。夢の原因——「覚醒時の周りの状況」・「夢の出所」——についても、生涯変わらず記録し続けた。

以上を踏まえた上で、第2～4章では、熊楠が夢を記録し続けた理由と、「やりあて」と夢の関係を中心に考察する。そして、第5章と第6章では、熊楠の夢と関連させながら、特に熊楠の「在り方」へアプローチし、さらに「生命そのもの（根源的な場）」とは何かを問う。終章では、自己が他者といわゆる健全な関係が持てる「適当な距離」を「中間」とし、「全てが統一された世界」と「現実界」をつなぐ場所を〈中間〉とした上で、熊楠の「ポジション」について論ずる。

【第2章】では、熊楠の夢の記述の中でも、特に多く登場する羽山兄弟を取り上げる。熊楠の日記における夢の記述は、羽山兄弟に関する事で始まり（1888年6月16日）、羽山兄弟に関する事で終わる（1941年11月30日）。熊楠と羽山兄弟は「intimate friend」、つまり「深友」であった。羽山兄弟は、熊楠が在外中に夭折するが、この「絶対的他者」の

喪失が、熊楠に何をもたらしたのかを、ヘーゲルの哲学及び C.G.ユングの深層心理学（元型論）を援用しながら考察する。そして、羽山兄弟とは、熊楠の欠落した部分を完全に補う「アニマ」であったことを示す。そのことが、熊楠による、採集・観察行為にも大きな影響を与えていたことを明らかにする。熊楠は、夭折した羽山兄弟の「代替者」（ロンドンの或るパーメイドや熊楠邸の借家に住んでいた子ども）を作り出す。しかし結局、熊楠は、彼らから「跳ね返される」（あるいは熊楠自身が彼らを「跳ね返す」）ことになる。そのことによって、熊楠が得たものとは、一体何だったのかを論ずる。

【第3章】では、特に筆者が作成した「データベース資料」を参照にしながら、熊楠の夢の考察が、どのように「事の学」へと昇華し、さらにその後どのように展開していったのかを述べる。「心」と「物」が交わる「事」たる夢を、熊楠が日記にどのように記述していたのかを中心に見ていく。熊楠が、「事」たる夢を、ここまで執拗に追究した本当の理由を明らかにする。我々にとっては「内的・心的要因」と「外的・物的要因」が交わり、夢が現出するという事は、さほど不思議なことではないように思われる。なぜなら我々は、自己（心）と他者（物）が適度に交わる「場」について、殆ど深く考えたことがないからである。いや、考えるまでもなく、そのような「適当な距離」を保持してしまっているのだ。一方、熊楠と対象の「距離」は、極端に遠いか、極端に近いか、あるいは、自己（心）と他者（物）が全く分離する程離れているか、ぴったりと合わさってしまう程接近しているか、そのどちらかであった。故に熊楠にとって、両者が適度に交わる「事」とは、極めて不思議な出来事だったのである。熊楠には常に、夢の世界から現実の世界へ戻るができなくなるのではないかという懸念があった。いつも「退路」を見失うことを憂慮しなければならなかった。熊楠にとって、現実界に戻り、自己を「ポジション設定」するためには、現実の世界と夢の世界の特徴をはっきり見極めておく必要があったのである。夢と現実の違いを当たり前のようにわきまえている我々とは異なり、熊楠にとってそれは、全く当たりの事柄ではなかったのだ。熊楠が執拗なまでに夢の原因を追究し続けた理由の背景には、「適当な距離」が保持できないという切実な問題があったのである。熊楠は、「適当な距離」において空談するような「世人 *das Man*」にはなれなかった。そのような熊楠の抱えた「不安」と我々の「不安」の相違を、本章の最後で考察する。本章では、未だ刊行されていない、1914～1925年及び1941年の日記の記述については、故・岡本清造氏が翻刻したノート及び、筆者も所属する南方熊楠翻字の会で翻刻した記録に依った。

【第4章】では、マイケル・ポランニー（Michael Polanyi 1891～1976年）の「暗黙知」・「潜入・内在化 *indwelling*」、C.G.ユングの「集合的無意識」の考えを取り入れ、熊楠の（夢などによる）「やりあて」が、いかにして可能になったのかを中心に述べていく。熊楠の言う「tact」を、「熟練能的tact」と「生得的tact」に分け、「やりあて」の質について考察する。「tact」とは「適否を見極める鋭い感覚」などと訳される。その「tact」を発揮

し「やりあて」するには、長年の熟練が必要である。例えば、いわゆる「職人技」などはそれにあたる。つまり「職人技」などには「熟練」によって鍛え上げられた「tact」が必要なのである（＝「熟練能的tact」）。一方、例えば「死の予知」、これも「やりあて」と言えるものだが、それには「熟練能」は必要ない。むしろ、生まれ持つての素質（innateness）がものを言う。「生得的な」素質による「tact」が必要なのである（＝「生得的tact」）。さらに筆者は、「熟練能的tact」による「やりあて」を、「発見的創造」と「芸術的創造」に分類した。前者は、「indwelling（対象への潜入・内在化）」→「（諸細目の）統合」→「ひらめき」→「行為」→「やりあて」という段階を経るものであり、後者は、自我を瞬間的に滅却し対象と一体化することによって成し遂げられるものである。本章では、両者のプロセスを、図を用いて検証する。次に、「生得的tact」による「やりあて」である「死の予知夢」を、熊楠が経験した事例から考察する。また、どのようにしてこの種の「やりあて」が可能になるのかを、ユングの「共時性」の概念を手掛かりに論ずる。そしてこの「やりあて」が可能になる場こそ、「南方曼陀羅」で言うところの「理不思議」であったことを示す。最後に、熊楠にオカルティズムへの考え方を一変させた、マイヤーズ（Frederick William Henry Myers 1843～1901年）の『ヒューマン・パーソナリティー *Human Personality and Its Survival of Bodily Death part 1 & 2*』とはどのような書物であったのかを見ていく。同書は未だ翻訳（和訳）出版されていない。ここでは、熊楠が自身の論考において同書を参照にした箇所を和訳し載せた。今後、マイヤーズ及び心霊現象研究を行う者に対して、意義ある資料となると思われる。

本章において筆者が主張したいことは、「やりあて」や「テレパシー」、「ラポール」といった現象の有無ではなく、それらを脳科学などに丸投げせず、哲学的に考えることが、人間の「在り方（自己—他者関係）」を深く知るための鍵となり得るということである。

【第5章】では、熊楠の「やりあて」、特に筆者が言うところの「熟練能的tact」による「やりあて」を考察する際、欠かすことができない事柄——熊楠と対象との在り方——について述べる。熊楠による「採集」と「観察」という行為を、S.フロイト、メラニー・クライン（Melanie Klein 1882～1960年）の言う「投影同一化」と「取り入れ同一化」をキーワードに考察し、南方熊楠という人物そのものに迫りたい。熊楠が、粘菌、特に原形体に見出していたものとは何だったのか。それは、熊楠自身に欠けたもの（アニマ）であった。熊楠はそれを取り入れ、あるいは自分自身をそれに投げ入れることで、「完全性（統一）」を希求したのである。しかし、この「統一」はすぐに「分裂」する。それはなぜなのか——この問いについて、ヘーゲルの言う「無限性」をヒントに考察する。熊楠は、他者から極端に離れてしまうため、「奇人」・「変人」と呼ばれることがあった。そしてあまりにも離れすぎた「距離」に自ら気づき、それを埋めるため、そして完全な自己像を求めて、再び「採集」・「観察」へのめりこんだ。このような繰り返しが熊楠の生き方には如実に見られる。熊楠と対象との関わり合いを深く考察していくとき、これまで多くの書物等で語られ、そして我々

の多くがイメージするようになった、彼に対する「強靱な精神を持った森の巨人像」とは全く正反対の、「狂人」を恐れながらも常にその近くにしかいることができなかつた「不安定な自我の持ち主」という一面が見えてくるはずである。熊楠は常に、自我の消滅・人格の死と隣り合わせにいたと思われる。それは熊楠にとって苦しみでもあつただろう。しかし、そのことが南方熊楠という人物を極めて特異で魅力的なものにしていることも確かである。

[第6章]では、「南方曼陀羅」解釈における最大の難関、「大不思議」とは何かについて論ずる。(夢などによる)「やりあて」が可能になる場を「理不思議」としたとき、その領域と、「大不思議」との関係はどのようになっているのかを、さらに熊楠の立っていた「場所」とはどのような処だったのかを、「通路」(ヴァルター・ベンヤミン Walter Bendix Schönflies Benjamin 1892~1940年)の概念を用いて考察する(ベンヤミンは「通路」を「商店であり住居」、「家であり道路」であるとし、それを両義的なものとして位置づける。それは、単なる「道路」ではない。両極の特性が未だ残りながらも混じり合う、ある種「特殊な場」なのである)。さらに、「大不思議」こそ、全てがそこから生まれ、全てがそこへ帰還する「根源的な場(生命そのもの)」であることを、熊楠の言葉から明らかにする。簡単に言えば、「理不思議」とは、自己と他者の区別が不鮮明になる領域(ユングであれば、そこを「集合的無意識」と言うであろう)であり、「大不思議」とは、自己と他者が完全に融合した領域である。自他が融合した「根源的な場」からの「力」を感じつつも、まだかろうじて「自己」であることが可能な場、これこそが熊楠の言う「理不思議」という領域であつた。本章では、そこにおいてこそ「やりあて」が可能になることを明示する。熊楠は、自己と他者の区別が不鮮明になる場(理不思議)に、しばしば立っていた。彼は統合失調症に極めて親近性のある気質の持ち主だつたように思われる。自己と他者の境界が不鮮明になっている統合失調症者は、かつて「自己規定」されていた(自己と他者が明確に区別されていた)場所へ戻ろうとして苦しむ。自他が不鮮明な場所に留まることは、「現代社会」においては「異常」とされるのである。しかし、もし自己と他者の区別が不鮮明な場が、「生命そのもの」(「根源的な場」、つまり自己と他者が完全に融合した場)に最も近い処であるとするならば、「異常」を有しているのは、実は我々の方なのではないだろうか。自己と他者の「区別」を徹底化し、そこに安住しようとすることは果たして「正常」なことなのだろうか。「統一(根源的な場)」こそ「真」であるならば、そこから完全に離れ、さらにそこから目を背けようとするこそ「異常」なことではないだろうか——。本章では、熊楠の居た「ポジション」を通して、このような問いを呈する。我々は、「大不思議」という「根源的な場(統一)」から分離し、各々「個人」の生を営んでいる。とはいえ、やはり我々は、この「根源的な場」に根ざしてもいる。だからこそ、我々はこの「根源的な場」への問いを発することができるのである。本章では、熊楠による「大不思議」への言説を基に、人間の「在り方」を考察する。

以上の考察から、終章において結論を導き出す。

【終章】では、「中間」と〈中間〉の位相の違いと、熊楠の居た「場所」^{ポジジョン}を議論の中心に据える。簡単に言えば、「中間」とは、自己と対象とが「適当な距離」にある場所であり、〈中間〉とは、「自己と対象が統一された場所」と、「現実界」の「間」の場所である。熊楠は、ある論考において、「夢というものは、この世（現実界）とあの世（統一・無）の〈中間〉に位置するものだ」という、興味深い言葉を残している。「統一」とは、楽園（エデンの園）でもあり、狂人（無）の域でもある。熊楠は、ふとした瞬間に自身の「アニマ・片割れ」と同化し、この「統一」へと入りこんでしまうような気質の持ち主だった。そのような熊楠が、生涯をかけて「中間」を求め続けた真の理由を明らかにする。さらに、「個的生命」と、「生命そのもの」の関係を、「南方曼陀羅」を基に考察する。「事」という「中間」領域は、自己（心）が他者（物）と適度な関係を持てる処である。いわば、我々「個的生命」が生きている日常世界でもある。そして、この「個的生命」に含まれながらも、それを超えてもいるものが、「生命そのもの」（根源的な場）である。それは「南方曼陀羅」で言うところの「大不思議」にあたる。さらに、「個的生命」が営まれる場と「生命そのもの」は、両者の〈中間〉である「理不思議」という「通路」^{パサージュ}によってつながっている（結合させられている）ことを示す。熊楠は、この両者が混在する「理不思議」に、身を置くことができた。——以上の考察を踏まえ、この「通路」^{パサージュ}こそが、人間の「在り方」を探究する際、最も重要な鍵であるという結論を導き出す。補遺では、熊楠の最晩年の夢を、彼の近親者の言葉から紹介する。

【データベース使用例】では、付録 CD-R の「[データベース資料] 南方熊楠 夢の記述に関する研究—「やりあて」と関連させながら—」の使用方法を説明する。巻末にはデータベース資料（「日記 1」〔1885～1913 年の日記〕・「日記 2」〔1914 年～1925 年、1941 年〕・「書簡」・「論考」）を添付した。付録 CD-R データベース資料は、関連項目からリンクを貼り、夢に関する記述の全文・抜粋を PC 上で閲覧することができるようになっている。また、熊楠の夢に登場する人物の詳細（経歴、熊楠との関係など）も見ることができるようにした。さらに、年ごとに「熊楠にまつわる主な出来事」も閲覧できるようになっており、本データベース資料は、熊楠に関する、いわば「総合事典」的役割を果たすものとなっている。

※

熊楠による夢への言説を考察することは、人間の「在り方」（自己—他者関係）、そして〈中間〉というものが、いかに可能性に満ちたものであるかを知るための重要な契機となり得るはずである。

本論文における研究方法は「精神分析学」のそれとは全く異なる。

精神分析は夢の世界の一つの次元、すなわち象徴的語彙の次元を探查しているだけであ

り、この次元に沿ってどこまで進んでも、そこではある決定的な過去がその象徴である現在へ転換されるだけである。

フーコーが『夢と実存』において、こう述べるように、本研究では、夢の「象徴的語彙の次元を探查する」ことに主眼を置かない。むしろ、夢は「おのれと世界との統一を見いだす精神の運動」である、という立場に重きを置き、考察を行う。

筆者は、本稿で二つの成果を上げることができた。一つは熊楠の夢の記述に関する「データベース」を作成したことである。この「データベース」の用途はさまざまである。特に今後、熊楠の深層心理の研究、あるいは精神医学的な研究を行おうとする人々に対し、少なからず役に立つであろう。もう一つは、南方熊楠という「**Extreme Person**（極端人）」に、哲学・心理学・史学的なアプローチ、言い換えるならば超領域的（**trans-disciplinary**）なアプローチの可能性を示したことである。このようなアプローチ方法はおそらく今までにはなかったものであり、しかしながら熊楠という「巨人」を捉えようとする際、最も有効な手段でもある。さらに筆者は本稿において、〈中間〉という、おそらく人間の「在り方」を考察するための、もっと言うならば哲学的思索のための、絶対的な条件とでも言うべきものを、南方熊楠の思想を通じて、明らかにすることができた。——それは、我々にとって、最も近いが故に最も遠いものを考究するための、いわば「前提」でもある。

注釈)

- 2 ページ以降は No. 1 を複写してご利用ください。
- 副題は使用される場合のみ記載してください。
- 本文が英文による場合、和文・英文の表記位置を入れ替えてください。